



# 政治学愛憎——「学問とは何か」の前に考えるべき事

木村, 幹

---

(Citation)

書齋の窓, (680):24-25

(Issue Date)

2022-03-01

(Resource Type)

article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100478243>



## 政治学愛憎——「学問とは何か」の前に考えるべき事

神戸大学大学院国際協力研究科教授

木村 幹

Kimura Kan

思いがけず執筆の機会をいただいたので、先月の本誌「巻頭のことば」へのお答えとして、昔話でも書いてみたい。うだつの上からぬ地域研究者の、つまらない独り言である。

大学院生の頃は笑っていた。研究は楽しかったし、将来は希望に満ちて見えた。周囲には優秀な研究者が沢山いて、次々と優れた業績を上げていた。あんな風になりた、と心から思っていた。

でもある時、「こっち」「あっち」という言葉を使う人達がいる事に気づいた。「こっち」とは当時、日本に入り始めていた政治科学的な研究をする人達、「あっち」とはそれ以外を指すらしい。「君はあっちだから」と言われて、「何だよ『あっち』って」といつも思っていた。変な線引くなよ。すぐにもう一つ気づいた。政治科学的な研究をする人達の多くが、自分達の研究こそが優れており、「非科学的

な」古い政治学は批判されるべきものと考えている事だ。そんな古い政治学に、学会の場で敵意をむき出しにして批判する人達もいた。会合では嘲笑に満ちた会話が交わされた。そして思った。彼等にはやはり「あっち」側にいる自分も同じ様に見えるに違いない。そしてそれが研究のスタイルによるものなら逃れる術がない。出口がない。

恐ろしくなり、何度も体調を崩した。批判されるのは、自分の至らなさの結果であり、研究スタイルの為ではない、と思いたかった。だからある会合で、ある人に、著名な地域研究者の研究業績について尋ねてみた。返ってきたのは、一番聞きたくなかった言葉だった。「ああ、あんなのは研究じゃないね」。頭がくらくらしてトイレで何度も吐いた。

やがて教え子に言われる様になった。「先生は笑わないんですね」。心療内科では学会に行かないよう勧められ、会費が勿体ないので学会は辞めた。一〇年以上の月日が流れ、

彼等は随分偉くなった。私は今も心療内科に通っている。

研究者は「学問は如何にあるべきか」を議論する。それは時に必要かも知れない。問題は、それがフェアに行えているかである。例えば「政治学が如何にあるべきか」を議論する時、殆どの論者は、自らの研究を中心に据え、外れたものを除外する。それは様々なポストや研究資金を巡る争いにも絡んでくる。でもそれはストライクゾーンを自らに有利な様に設定して野球を行う様なものだ。そんな議論がフェアである筈がない。

ある特定の学問がどうあるべきか、について究極的な答えなど存在しない。何より、学問の発展の為に多様な研究が必要だ。比較政治学一つとっても、地域研究者がデータを集め、方法論に通じる人が分析方法を考案し、初めて異なる国や地域の間での比較が可能になる。最後の段階で比較をする人だけの研究が比較政治学だ、というのは、料理の盛り付けを奇麗にする人だけが料理人だ、というのと同じくらい馬鹿げた議論である。

そもそも学問は、多様な研究者が各々の役割を果たし、初めて可能になるものだ。韓国語が分からない人には、韓国の人々の使う言葉のニュアンスはわからない。そしてそ

れがわからなければ、例えば、日韓両国の歴史認識の違いが、「比較」できる筈がない。

だから、研究において重要なのは、何よりも他人や他人の研究に対する信頼と敬意である。しかし、時に人は異なるスタイルの研究を排除しようと試みる。「地域研究は比較政治学の一部ではない」。そんな言説もその表れの一つだろう。しかしそれは私には、自らの優越性を示す為の行為にしか思えない。更にはその為に、文脈を離れて誰かの古い研究を探し出す。そんな行為が、肯定的な何かを生み出すとは私には到底思えない。何よりもそこには他人と他人の研究に対する敬意は微塵も存在しない。私達の研究と研究者としての人生は、誰かの都合の良いおもちゃではない。

顧みれば若い頃の私にも、他人や他人の研究に対して同じ様に対した事がなかった訳ではない。当時を振り返り忸怩たる思いであり、心からお詫びしたいと思う。情けない。だからこそ思う。私が若い頃に志した政治学はこんな学問じゃなかった筈だ。互いへの信頼と敬意のない学問に発展など存在しない。今こそ、こんな馬鹿げた事はもう止めるべきではないのか。他人や他人の研究をあざ笑い、都合の良い線を引いて、自分達の住む世界から排除する。そんな愚かなことは我々の世代で、終わりにしようではないか。